

東北ブロック大会で基調発表を行った次の年も「福島県国際理解教育研究会」には、最初から出ようと決めていたところ、会長さんから電話があり、「高澤先生、監事やってくれない。総会も出てちょうだい」とのことだった。どうやら会の役員に名を連ねることになったようだった。「幹事だと大変だけど監事だからいいか。いずれにせよ毎年参加するつもりだし」と考え、引き受けることにした。

この会の会長を務める先生は、私の影響を少なからず受け、タイのバンコク日本人学校に教頭として3年間行っていた方である。奥様が私の同僚で同じ学年であった。どちらかという、奥様が海外に行きたくて旦那さんの背中を押したようである。私の同僚である奥様は音楽の先生で、自分の中では勝手にイタリアに行く決めていたそうである。

バンコク日本人学校は児童生徒数2600人である。毎日150台のスクールバスが運行している。全く想像がつかない。日本ではあり得ないこのような規模の学校で教頭先生をやっていたのである。加えてこの当時のタイでは様々な問題が発生した。その対応の最前線で陣頭指揮をとっていたのである。海外の日本人学校では、日本の学校とは違った政情不安、自然災害などの問題が発生することがある。日々生命の危険を感じながら生活しなければならない場所もある。現在であれば、香港や中国、イランなどの日本人学校が大変な状況にあることは想像に難くない。

海外の特殊な環境の中で、日本の子どもたちの教育に携わり、苦労もあれば、楽しいこともあった先生方の集まりであるこの会は、互いの思いを共有できる貴重な場となっていると思う。これから派遣される先生方、ご家族にとっては、日本人学校や補習校の予習ができ、様々な経験談を聞くことで、多少なりとも不安が軽減されることもあるだろう。24年もの間続いている歴史のある会に自分がどれほどの貢献ができるかわからないが、監事から副会長になったことでもあるので、組織の力を生かして会の発展のために努力してみようと思う。

今までのことを振り返ってみると、私の知り合いで日本人学校に旅立っていった方は片手では足りなくなった。数年前までは、自分から日本人学校のことを話すことはなかった。人に聞かれれば答える程度であった。生徒にも話すことはなかった。たまに学級通信に載せるくらいであった。それでも私との出会いが縁で海外に飛び立つ人がいるということは、何かしらの影響を与えているのだと思う。このことは教師と生徒の間でも起こる。教師の方では意識していなくても生徒には影響を与えているのである。

私のローマ日本人学校の教え子たちは、帰国して大学に進み、社会人として活躍している。中には日本とイタリアの貿易に携わる仕事をしている者がいる。一流商社に就職した者も複数いる。海外にいたことが彼らの人生に影響を及ぼしていることは間違いない。

今の時代、海外に行くことは珍しいことではない。若者にはぜひ日本を離れて海外に行ってほしい。旅行、留学、仕事など形は様々だが、現地に行かなければ感じられない、わからないことがある。もし目の前にチャンスがやってきたらトライしてほしい。普段は見えない自分の国、日本のことが見えてくる。日本のことを考えるようになる。視野を広げること、世界を見ることは大切なことである。「国際理解教育」という言葉は定着したが、その実態はどうであろうか。これを牽引していくのは、やはり海外を知る教員なのではなかろうか。それが使命なのだと思う。